泉鏡花「海戦の余波」論

伊藤かおり

一、はじめに

泉鏡花は明治期から昭和期にわたる生涯を通して、「高野聖」「天守物語」などの幻想作品、また「婦系図」「日本橋」などの花柳界を舞台とした作品を多く発表したことで知られ、その作品は、現在に到るまでなお舞台化され続けるほど人気が高い。また、彼の作品の多くが、自身の経験、特に幼児期の体験をもとに描かれているということは、多くの研究者の間で言われていることである。

しかし、鏡花が子どもに向けて作品を発表していた時期があることには、あまり言及されない。彼が児童文学を発表した時期は、彼の作家活動のごく初期、一八九〇年代に集中している。その理由について、村松定孝は「博文館が幼年の読者を対象とした雑誌や出版物を旺んに刊行するようになると、紅葉は鏡花の原稿をそこに売込むことによって、生活の資を得させようとしたのであった。」[注一]と述べている。そのため、芸術的に他の作品に劣ると考えられているのか、泉鏡花その人や作品に関する研究は膨大であるが、彼の児童文学作品について述べた文献はごく少数である。[注二]

しかしながら、鏡花が児童文学作品を集中して執筆した時期は、彼がその作風を確立する上で重要な時期であったと筆者は考える。そこで、本論では、特に「海戦の余波」を詳細に見ることで、鏡花がどのように自身の作風を確立していったのかを探り、この作品が児童文学として発表された意義をも明らかにできればと思う。

二、『海戦の余波』執筆・出版事情

『海戦の余波』は『幼年玉手函』第十一編として、一八九四(明治二七)年一一月二六日に博文館から出版された。この本には同じく鏡花によって書かれた「譬喩談」が附載されている。『海戦の余波』は、同じく博文館から出版されていた子ども向け雑誌『幼年雑誌』第四巻第十六号より第二十三号にかけての「大和心」連載の合間に出版されている。

鏡花は、『海戦の余波』出版の前年、一八九三年に『京都日出新聞』で「冠弥左衛門」を連載した。これが公に発表した最初の作品となる。そして同年に『少年文学』第十九編『侠黒児』の付録として「金時計」を発表した。また、『海戦の余波』発表に前後して、一〇月には「予備兵」を、また翌月には「義血侠血」を『読売新聞』に発表している。彼が一躍世に認められることとなった「夜行巡査」「外科室」は翌一八九五年の発表なので、この頃の鏡花はまさに駆け出しの作家であったといえよう。

なぜ、駆け出しの作家であった鏡花に、まるまる一冊の執筆が任されたのであろうか。

木村小舟は、この前年に博文館が発行した『少年文学』叢書が大

成功を収めたことに触れた後、『幼年玉手函』叢書の出版について、「好果を追逐し機会を見逃すことなく、これに類似するが、或は更に一歩を進めし企画を立てるは、業者として当然の手段と見なければならぬ。」[注三]と述べている。この叢書は巌谷小波による『狂言春駒』から始まり、約一年をかけて全十二編で完結した。小舟によると、『少年文学』が翻訳・偉人英雄の伝記を中心に、材を広く多方面にわたって求めたのに対し、『幼年玉手函』は聊か統一性に欠け、『少年文学』ほどの成功を見なかったという。

このことを考えると、鏡花がまるまる一冊の執筆を任されたのも、有り得ることといえよう。

さて、「海戦の余波」の背景となっている日清戦争が当時の日本においてどう捉えられていたかについて少し述べておくこととする。鏡花の最初の児童文学作品である「金時計」、同じ頃に連載していた「大和心」では、治外法権に対する当時の民衆の鬱屈した感情を取り入れるなど、鏡花は一八九三年から一八九四年にかけて発表した児童文学作品には時事問題を必ず取り入れている。「海戦の余波」の背景は、治外法権ではなく日清戦争だが、これも同じく時事問題を取り上げた作品として特徴付けることができよう。

日清戦争は、その特徴として在野の戦争支持が挙げられる。檜山幸夫『日清戦争――秘蔵写真が明かす真実』によると、在野が唱えた戦争支持の論理として「義戦論」と「文野の戦争論」があるという。前者は清国との戦争は朝鮮の独立を助けるものとする論、後者は文明国日本と野蛮国清国との戦争であるとする論である。日露戦争とは異なり、この当時、反戦論はほとんど起こらなかった。福澤諭吉やキリスト教指導者の多くまでもがこの戦争を支持したのである。

知識層の多くが戦争を支持した当時、実際の出版界の動向はどうであったのか。『少年文学』『幼年玉手函』などを発行し、当時の児童文学出版の主流を担っていた博文館は、一八九四年八月三〇日に旬刊の雑誌『日清戦争実記』の第一編を刊行している。内容は戦況、日本・中国・朝鮮の戦史、忠勇美談、詩文にまで及び、第六編の時点で計一〇二万部を売り上げたという。また、少年向けとしては『幼年雑誌』の号外として『征清画談』を発行する。これは一八九五年に博文館の全ての少年向け雑誌を統合する形で創刊した『少年世界』に「征清画談」という一欄を設けることで受け継がれ、日清戦争が終わるまで続けられた。

一般の国民の熱狂ぶりも想像される。その様子は鏡花が「予備兵」「凱旋祭」に描写しているが、実際、全国各地で戦利品の展示会や戦勝祝賀会が開かれ、川上音二郎一座が戦争演芸を上演した。折からの不平等条約に対する不満は日本国民を団結させ、日清戦争を通してますます愛国心が喚起されていったのである。

「海戦の余波」はこのような熱狂的な雰囲気の中で執筆された。そのために、清国人に対してかなり侮蔑的表現が用いられる。それ

もまた研究者に敬遠される理由なのかもしれない。

三、主人公・千代太の描写

ここでは「海戦の余波」の主人公である千代太がどのように描かれているかを見ていくが、その前に、それ以前の鏡花の児童文学「金時計」と「大和心」における主人公の描写について触れておく。

「金時計」は、草原で金時計を紛失したと嘘をついて地元の日本人に無報酬で草刈りをさせた西洋人へいげんに対し、少年・三郎が掏摸に金時計をすらせ、その金時計と引き換えに出させた礼金を土地のものに分け与えることで復讐を成すという物語である。

この三郎は子爵という高貴の出で、「才名同族を圧して、後来多望の麒麟児なり。」(中)[注四]と描写される。物語の最後においては、へいげんの奸計を知らされた土地の者たちの先頭に立って、へいげんから金時計の対価百円を奪うという、きわめて英雄的な行動を取る主人公である。

「大和心」では、神社の境内に故意に馬を乗り入れて神域を汚した外国人すたるでんが敵役として登場する。主人公の少年、鶴岡健児はその事実を知り、義憤に燃え、絵の巧みな姉に等身大のすたるでん像を描かせる。健児は日々、愛犬・飛龍にすたるでんの絵の咽喉笛の部分に跳びかからせるという訓練をする。そんなある日、健児はすたるでんに遭遇し、その落とした帽子を谷底に蹴り落としたために、すたるでんに銃を向けられる。それを助けたのが飛龍であった。日頃の訓練のとおりにすたるでんの咽喉笛に喰らいつき、同時に発射された銃弾に倒れた飛龍は病院に運ばれる。その手術を執刀したのが外科医・村上千吉である。直後、すたるでんが運び込まれるが、「医師が責任を負つて手術をする上は、犬だつて猫だつて予後の注意に異はないです。」と言って、すたるでんを待たせる。すたるでんは手遅れで命を失い、よって復讐が成されたというのがこの物語の顛末である。

この「大和心」の主人公・鶴岡健児は、直接復讐を成立させるわけではなく、「金時計」の三郎に比して、主人公としての役割は薄いといえよう。しかし、健児は陸軍少尉の息子という、高貴ではなくとも比較的地位があり、また国家にも貢献している家の出身である。健児はすたるでんと対峙した時、「悚然ともせず」向き合い、敵の前でも怖れを知らない英雄的な人物として描かれている。

主人公たちの、子爵の息子、陸軍少尉の息子といった身分は、当時の読者層を鑑みて設定されたとみることもできる。身分のある家の生まれという背景があり、義憤に駆られて悪を挫く強い主人公、英雄的な主人公というのが、「金時計」「大和心」における主人公像である。

しかし、「海戦の余波」における主人公・千代太は、これらとは少し様相が異なる。

千代太は九歳、松枝海軍中尉の一子で、父が日清戦役のために出征して後、母の故郷である越後に母に伴われて帰っている。それも、

都会での煩わしい交際を避けて、父と同じく将来の海軍士官となるべき千代太の養育にのみ心を砕けるようにという母の配慮からであった。千代太は、まず、英雄としての天賦の素養をもつ子どもとして描写されている。彼は「生来賢き童」(一)なのである。

第二章の冒頭においては、「今や滅亡の期の来りたる、地球の末路を見るに似たり。」という情景の後に続けて、「素養の力か、天性か、這少年の泰然たる、千曳の磐に異ならず。亭として直立しつゝ、屹と海面を瞰下す状、父はいかなる人傑ぞ、げに栴檀は嫩より香しといへる語は、千代太の為に先人が、作り置きしが如くなり。」と千代太の様子を描写している。「地球」という壮大な語を用いた表現の後に千代太自身の描写を並べることで、千代太という子どもの偉大さを強調しているのである。

また、千代太は、「鬼を欺く荒漠等」(二)といわれる船乗りたちには、難船救助の際、「船長」「船玉様の生替り」(二)と仰がれる。そうして船乗りたちの先頭に立って荒海に乗り出した千代太は「天が降せる使」(二)と表現され、初めの二章で、既に神聖で犯すことのできない英雄としてのイメージを附与されるのである。

これらの描写は、千代太の天性、素質について述べたものである。この物語において千代太を英雄たらしめているのは、これまでに述べた天賦の素養のみならず、千代太が自ら理想とする英雄像を裏切らず、悉く実現するという行為にもよる。そのような千代太の理想の英雄像とは何なのか。それは「日本国民」(一)として出征している千代太の父・松枝海軍中尉に他ならない。千代太は、「君と国とに尽すべき義務のためには、妻をも子をも顧みざるが、日本国民の国民たる所以なる」(一)ことを知っている。これは、千代太が実際に目の当たりにした父親の行為であり、父は実際にこの時、妻子を顧みずに出征している。千代太はその父を「父様が在らつしやればきつと助けてお遣りだア。父様は軍艦に乗つてるんだい。」(二)と、終始理想の人として仰ぐ。

父は千代太にとって行動の動機ともなる人物である。千代太の冒険の発端は、父親への思慕のために嵐も厭わず海辺に出かけたことにある。更に、冒険の途中、龍宮の姫に庇護された千代太は、「支那に辱しめられて、遁出した様な卑怯者は、父様に逢はれないのだ。父様もお逢ひでない。」(一六)と駄々をこね、この後、龍宮の姫の協力で「支那人」に対して遺恨を晴らすことを得る。父親に逢いたいという思慕が千代太の内部を貫き流れ、それこそが彼の行動の原動力となっているのである。

千代太による父親への思慕が物語の原動力となっているなら、窮地において父親ならどう行動するか、その考えこそが千代太の行動の指針となっている。第四章で敵国人である「支那人」に虜囚の憂き目に遭わされた時も「未来の海軍士官は軍機洩すべからず」と決意し、拷問にも屈しなかった。このように、父は、千代太にとって理想の英雄、行動の原動力であり、また指針でもあるのだ。

これまでの英雄的な行動を取るという主人公像は、「金時計」や

「大和心」の主人公と変わるところがない。しかし、千代太は英雄的な行動を取って強いだけでなく、無邪気さ、弱さをも併せもつ子どもである。それは既に第一章において、「さすがに頑是無く、寝覚も父を慕ひて、父をして遠征に赴かしめしは、母の所為にてあるかの如く、其不在を母に怨みて、其帰宅の晩き理由を、母に詰ること屢なりき。」と、我が儘や寂しさを堪えきれない様子からもわかる。そして、千代太が人々に好まれ受け入れられるのは、英雄的強さのためというよりも、むしろこの無邪気さ、弱さのためなのである。龍宮の姫や船乗りたちは千代太の「愛らしき」(二)のために千代太を愛する。

千代太は冒険の中途に置いても、英雄的な強さを顕すとともに、子どもの弱さを露呈させる。第二章では難船を救う力のない無力感に千代太が泣く場面があるが、そんな千代太に対して、船乗りたちは「今や千代太の泣き居れるを何かは知らねど慰めなむとて、徐ら幼児を抱かむとせり。」という、子どもをあやすような行動を取る。また、「支那人」の拷問にも降伏せぬ強さを見せながら、「「あれえ母様！　母様！」と悲泣の声も幽になりぬ。」(四)と、いざという時に思わず母に助けを求める弱さをも示す。そして、この弱さが千代太を魅力的にしているのである。読者である子どもたちは、理想を高く掲げてはいるが、現実的に考えて、完全に強くいられる者というのは多くはないであろう。千代太のこの弱さは、そういった内面に弱さをもつ読者たちの共感を呼ぶこともあったのではないだろうか。千代太の英雄的行動は、千代太の弱さ、そして父を慕う一途さと相俟って、愛すべき健気さといった印象を与え、千代太を魅力的にしているのである。

こういった強さと弱さを併せもつ主人公は、鏡花の作品においては常に描かれているといってもよい。「義血侠血」の主人公・村越欣弥は、滝の白糸と異名をとる女芸人に学資を援助され、後に検事代理として白糸の罪を暴くが、「永く恩人と相見る可からざるを憂ひて」自殺する。村越は白糸に庇護され、その恩に報いるために自ら死を選ぶという、極端な行動に出るのである。また、一八九六年に発表された「照葉狂言」では、主人公の貢は恩人の女芸人小親と、姉とも慕うお雪のどちらを選ぶこともできず、二人のもとを離れて放浪する孤独な未来を選ぶ、ある意味で強さの必要な選択肢を取るのである。

しかし、これらの主人公とは異なり、千代太からは強さと弱さの差の激しい、分裂的な印象を受ける。それは、他の主人公たちが庇護してくれる女性のために強さを示すのに対し、千代太は庇護してくれる女性ゆえでなく、尊敬し憧れる父親ゆえに強くあるという点に起因しているのではないだろうか。千代太は龍宮の姫に庇護される以前、海原を漂流して「支那人」に捕えられた際に、既に強い英雄的な態度を取っている。他の主人公たちは弱さと強さの源が同じであるのに対し、千代太の場合はその源が異なるのだ。その違いが、千代太の分裂的な印象へと繋がっているのではないか。

弱さと強さを併せもつ千代太は、作品において魅力を醸し出しているが、一方で、このような不安定な印象をも与えているのである。この主人公像は、鏡花作品全般に見られるような典型的なものでありながら、他の作品には見られない特異さも示している。

四、竜宮――異界

鏡花の作品において、はっきりと異界といえるものが登場したのは「海戦の余波」が最初である。しかし、同時期に発表していた「大和心」において、異界の片鱗が既にみられる。連載の第四回は物語のクライマックスともいうべき健児とすたるでんの対峙の場面だが、これは鶴間谿を舞台に展開される。この鶴間谿は「丘の頂を行く者恰も谿間に生茂れる杉の梢を伝ふが如く見ゆるを以て、散策の人活きながら天狗に化するかと、憚りて遊ぶもの稀なれども、僻地は多くは異物を産し、頗る異花奇草に富む。」と描写され、さらに「魔界」と表現されるのである。この場所で不可思議のことが起こるわけではないが、この異様の表現から、ここも異界の一種と取ることもできよう。

では、「海戦の余波」における異界、龍宮についてみていく。

まず、龍宮の主である龍宮の姫について触れておきたい。

姫は「支那人」の虜囚となっていた千代太を、黒男を通じて救い出させた、いわば千代太の庇護者で、母から遠く離れている千代太にとって〈母なる存在〉である。しかし、姫は母になりえない。そのことは姫の「譬ひ母君の御慈愛には及ばずとも、優しき姉となりなむに、争で肯入れ給はぬか。」(八)という言葉に明らかである。

筆者は、姫は〈母なる存在〉であると述べた。ここで注意しなければならないのは、千代太の母は、千代太にとって紛れもなく母であるが、作品においては〈母なる者〉ではないということである。それは、千代太の母が、父が家長として絶対的な権力を有する家父長制社会に属する者であり、それに対応させるべく千代太を育てているからである。一方、姫は龍宮の主であり、龍宮においては彼女が長である。龍宮は女性が長として権力を持つ母権制社会的構造をもっており、その点において姫を〈母なる者〉としているのである。〈母なる者〉はまた、現世の母がそのイメージを付されるように、子どもに対して慈悲深く、子どもを庇護する存在でもある。そして、この龍宮の姫が司る世界が、生者の支配する現世とは異なる死の世界でもあるということは、作中第九章の「支那人」たちの会話に明らかである。

第八章に印象的な場面がある。姫が咲き乱れる紅白の花を示して「紅白の色孰か好き。」と問うと、千代太は白と答える。姫は「男は淡泊なるものなり。自分は女なれば紅なるぞ好き。」と言い、二人で花を摘む。そして千代太が摘んだ花は姫が好きといった紅で、姫が摘んだ花は千代太が好む白だったという場面である。

姫と千代太がそれぞれ好きだと言った紅白の花は、一読したところによると日章旗を思わせ、かつて黄龍王の守護が清国に向いていた(今は見捨てられている)のに対し、龍宮の守護が「大日本」に向い

ていることを感じさせる。だが、それだけであるならば、千代太が白の方をことさらに好きという必要はないし、また、姫と千代太が一方の色の花を摘んで交換する必要もない。

小林忠雄『色彩のフォークロア』によると、鏡花の生まれ育った加賀能登の辺りでは、火事の類焼を防ぐために火元の隣家では屋根に登って女性の赤い腰巻をふったという。これは女性の腰巻は不浄のもので、火付けの神の烏天狗が嫌うからしい。現在、一般的に見ても、赤いランドセルを背負う女児が多いことなど、赤は女性に縁の深い色とされている。それは月経や出産など、女性の生物的機能によるところが大きい。出産の忌を「赤不浄」「赤穢れ」などと言って、女性が祭礼などの参加を制限されることが古来よくあった。それに関連してか、生まれたばかりの子どものことを「赤子」「赤ん坊」「赤ちゃん」などと一般的に言う。これらの事例からも導き出されるように、赤は女性、生または再生を象徴する色であった。

他方、白はどのように用いられているのか。同書によると、かつての習慣として葬式の際に白い着物を着ることはよくあったし、金沢では、白山信仰の関わりに白が多く用いられていた。白は死の儀礼と深く関わってきたのである。

これらことを鑑みると、姫と千代太の間に行われた紅白の花の交換は非常に象徴的であるといえよう。

千代太が白い花を好むことから、後の「父が見度くば成長し、早く軍艦に乗組みて、討死してまた来れ！」(十)という父親の言葉に表されるような、日本のためには死をも厭わない軍人の子としての性格が垣間みえる。また死の世界である龍宮とそこを治める姫に対する思慕のためといえなくもない。

姫が好む紅の花は、姫の女性としての象徴であるが、生けるものである千代太への執着に近い愛情としての象徴とみることもできる。なぜなら、姫は幾度か千代太にこのまま龍宮に留まることを勧めるからである。千代太はその勧めに応じるかのように自らが摘んだ生と再生を象徴する紅の花を姫にわたし、死を意味する白い花を受け取る。

さて、姫は龍宮の長、〈母なる者〉として登場しながらも、千代太にとっては母ではありえないということは以前に述べた。それでも、姫は千代太に対し、一時、絶対にも近い大きな影響力をもつ。紅白の花を交換した後、千代太は姫に抱きしめられ、「其瞬間、父も母も故郷も、未来は海軍の士官たるべき予算をも、はた地球をも忘れ果て」るのである。

しかし、龍宮の姫の統べる海の世界は、死の世界である。そこは、海戦で戦死した者のたどりつく「冥土」(九)である。死という、生ける者に対しては避けることのできない絶対的な力を有する世界でありながら、万人に訪れるという死の性質のため、容易に侵入を許してしまう。この点が、異界との交流を描いた鏡花の他の作品、例えば「龍潭譚」、「高野聖」(一九〇〇年)、「草迷宮」(一九〇八年)などの、現世の権力の意のままにならない異界とは異なる。絶対的な力をも

つと思われた姫の司る龍宮は、実は現世の影響を容易に受けてしまう脆い世界だったのだ。

そのため、姫は龍宮の至宝である干珠満珠を「支那人」に奪われ、千代太とその父の力なくしてそれらを取り戻すことは叶わなかった。さらに、姫は千代太と共に暮らしたいと望むが、それは千代太の父によって阻まれてしまう。千代太は父に「父が見度くば成長し、早く軍艦に乗組みて、討死してまた来れ！」と、改めて海軍士官としての未来を示され、現世に戻るのである。ここに、〈父〉と〈母なる者〉の対立構造が読み取れる。龍宮の姫はかつて「譬ひ母君の御慈愛には及ばずとも、優しき姉となりなむに、争で肯入れ給はぬか。」と言って、千代太を龍宮に留めたが、それを千代太の父によって阻まれた。紅白の花の交換の際、一時は絶対の支配をもつかと思われた〈母なる者〉だが、〈父〉と〈母なる者〉との対立は、父が千代太を現世に送り返すこと、即ち〈父〉の勝利で終わるのである。

同じように、主人公が異界で〈母なる者〉に庇護される「龍潭譚」においても、語り手である主人公・千里が彼の属する社会への復帰を果たすことで、家父長制社会の現世の勝利と取ることができる。しかし、その後、千里の心に、姉にさえも見捨てられた時に彼を庇護した異界の女への思いは残る。現世に生きる千里の内部では、むしろ〈母なる者〉がその後もずっと影響力を持ち続けるのだ。対して「海戦の余波」では、千代太が現世に帰還した後、龍宮の姫に対する言及は全くない。この点から、現世において龍宮の姫が影響力を保持するとは考えにくい。

〈母なる者〉の影響力が制限されていること、そこに当時の子どもに向けた文学の特質があるのではないだろうか。当時の世の中は日清戦争の勝利に沸きかえっており、強い男性像、強い子ども像が望ましいものとして求められていた。一方、〈母なる者〉は、鏡花の文学において少年を庇護する存在である。庇護されるばかりの弱い子どもは、子どもに影響を与える児童文学において相応しくないという配慮がはたらき、さらに日本国臣民としての指針を示すために、海軍に身を置く父親の力が強くなったのではないか。

これまで〈母なる者〉の支配する異界について述べてきたが、続いて、異界と現世の境界に焦点を移そう。

「海戦の余波」において、異界と現世の境界は意識の空白によって示される。第二章の最後で千代太は嵐の海に転落し、続いて第三章で異界に入ったことが示される。第三章は次のような書き出しで始まる。

有恁し後、千代太がはじめて我といふものの此世に在ることを心着きたる時、渠はまた木の葉の如き小舟に乗りて青海原に漂へることを発見しぬ。

この描写からは、この前に千代太の意識に空白が生じていること

が読み取れる。実際、暴風雨の海が晴天の海へと転じており、どのような経過を経てここに至ったのか、場面の間に連絡はない。また、異界から現世に戻る直前に、千代太は勝利した日本の軍艦に乗り組み、一日ほど航海するのだが、「何処やらむ山水の明媚なる陸に近よるトタンずどんと一発の花火を打上げ、一流の旗に日本大勝利と記したるが颯と中空に飜る瞬間、愕然として驚き覚むれば、枕頭に母坐れり。」(十)というように、夢から覚める。この夢から覚める瞬間、ここにも意識の空白があるといってもよいだろう。

「海戦の余波」において意識の空白で表されていた境界が、「大和心」においては記述の空白によって示されている。「魔界」と表現された鶴間谿の場面は連載第四回で突然始まり、健児が、短銃を向けるすたるでんと対峙しているところでこの回は終わる。そして次の第五回は午後九時半頃の金沢病院の様子で始まり、この間の出来事は後ほど解説される。つまり、第四回と第五回の間には連絡がなく、意識の空白ならぬ記述の空白によって区切られ、鶴間谿の場面は孤立しているのである。

記述の空白、意識の空白によって形作られていた異界と現世との境界は、「龍潭譚」では沼という地形による境界、さらに「高野聖」では大水や蛭の森のような地形による境界と、道を横切る長虫に遭遇するといった出来事による境界へと移り変わってゆく。記述の空白、意識の空白といった断絶に頼らない境界へと変化していくのである。

五、鏡花と児童文学

なぜ、鏡花はこのような子どもに向けた文学に、他の作品に先駆けて異界や〈母なる者〉として表される女性、またその女性に庇護される少年といったモティーフを用いたのか。

田岡嶺雲は「鏡花の近業」[注五]の中で次のように評している。

> 或はいふ鏡花の小説は怪誕にして解す可らずと、解せざるは解せざる者の罪にして鏡花の為に非ざる也、今の浅俗なる膚受なる、物質的写実的散文的傾向が時代の思想を支配するに際りて、鏡花の詩的幽玄と神秘的深奥とが解せられざるは寧ろ怪しむに足らざる也、解する能はざるものは解する能はざらしめよ、是以て鏡花を累するに足らざる也、(後略)

これは鏡花が逗子に転地療養する一九〇五年に発表されたものだが、「怪誕にして解す可らず」と評する向きは、これ以前にもあったのではないかと推測される。また、子どもに向けた文学においても、不思議な話を害とするような風潮はあった。巌谷小波は、一八九九年一月に博文館から発行した『世界の始』(『世界お伽噺』第一編)の序文で、次のように述べている。

> 処で世間には、此のお伽噺の真価を解せず、あゝ云ふ根無し事を教へるのは、小供の為めに宜しく成いとか、妖怪話や不思

議談は、少年教育に害があるなどゝ、窮屈な事を云ふ人があります。(後略)[注六]

これが当時の風潮であったが、鏡花には、「怪誕」と評されるようなものも、小波が精力的にお伽噺を発表する子ども向けの文学においてなら、多少なりとも受け入れられるとの思惑があったのかもしれない。

しかし、「海戦の余波」を『幼年玉手函』叢書という媒体で発表したものの、子どもという読者対象が鏡花にとって枷になったのではないか。

鏡花は、「海戦の余波」において三人称による叙述を行い、千代太を外側から、しかしあくまでも千代太に寄り添う形は崩さずに描写している。ここに提示されているのは外から捉えた子どもである。しかし、それは子どもを主人公に据え、幻想味を押し出した鏡花作品においては異例のことである。子どもが主人公、あるいはそれに近い役割を果たす「化鳥」「龍潭譚」「薬草取」(一九〇三年)などの作品では、主人公による一人称叙述、あるいは成長した主人公による幼い頃を回想した語りという叙述方法を取る。ありのままの、そこにある子どもの内面、または子どもの目を通して見た世界に焦点を当てているのだ。脇明子は『ファンタジーの秘密』において、「子どもの目から見た世界の魅惑的な光景をとらえるということにかけて、泉鏡花の右に出る作家はあまりいないのではないだろうか。」[注七]と、鏡花を評価している。しかし、脇がここで述べている「子ども」は子ども時代の鏡花であって、「海戦の余波」の読者である子どもたちではないのである。

村松定孝は一八九七(明治三〇)年を境に鏡花の児童文学が変化すると述べているが、実際に「海戦の余波」のような積極的に行動する子どもを主人公に据えた作品はなくなっていく。その一方で、同年、一般向けの雑誌で「照葉狂言」「龍潭譚」、翌年には「化鳥」、翌々年には「鴛花径」といった、自らの子ども時代の体験に基づいた、内面的描写の多い作品を発表していくのである。

ここに、鏡花が児童文学を離れた要因の一つがみて取れはしないだろうか。彼は自らの描きたい子ども、即ち彼自身の子ども時代に根付くものと、実際の子ども読者との間に齟齬を感じたのではないか。

当時の児童文学では、現在よりもさらに教育性が求められ、立身出世という望みを抱いているような積極的に行動する主人公、即ち千代太のように「君と国に尽す」ことが期待される主人公が必要とされた。そして、実際に大部分の子ども読者にとっても、立身出世は将来の夢であっただろう。しかし、鏡花はそのような少年像に大きな違和感を抱いたのではないだろうか。それは、「海戦の余波」において三人称という叙述方法を取り、主人公とはやや距離を取ったということ、そして、千代太が分裂的印象をもつことからも明らかではないだろうか。

しかし、一九〇〇年以後、鏡花は一般向けの雑誌での執筆を主にするが、それでも度々思い出したように子ども向け雑誌に原稿を寄せている。一九一八年の『赤い鳥』創刊時には賛同者の一人として名前を連ね、さらに童謡を寄せている。現実の子どもを読者として想定せねばならない児童文学に枷を感じながらも、魅かれ続けていたのではないだろうか。

六、おわりに

鏡花は「海戦の余波」という児童文学作品において、後の彼の作品を特徴づける多くの試みをした。不安定な印象を与えるが、強さと弱さを併せもち、それゆえに魅力的ともいえる少年を主人公として登場させ、その主人公を異界へと旅立たせる。そこには彼を庇護する異界の女性が存在する。しかし、主人公が憧れるのは、庇護してくれる異界の女性よりも、むしろ海軍中尉の父であり、それゆえ現世との繋がりが深いという点は、鏡花の文学では特異なことだった。それは、子どもに対して国にとって有用な人間になるという将来を示さなければならなかった当時の児童文学の宿命といえるだろう。

また、本作には、鏡花が「高野聖」等に代表される、きわめて幻想的な作風[注八]にいたる過渡期ともいうべき特徴も見受けられた。その一つが叙述の方法である。彼は、この作品において三人称による叙述を行っているが、後に他の作品で一人称の叙述、さらに語りによる幻想の叙述へと移っていく。自らの経験から創出した幻想を語る上で、三人称による客観的叙述は相応しくなかったのだろう。

鏡花は児童文学という媒体において、後の鏡花作品の特徴の一つともいえる異界を提示した。それは当時の児童文学が教育性を重視しながらも、不可思議な話を受け入れてきたことにもよるのではないか。鏡花はこの作品において、たとえそれが後の作品と比べて拙いものであれ、自らの幻想を遺憾なく表現するためのきっかけを得た。そして、これから後、現在に至るまで読まれ続ける幻想的な作品を展開していくのである。

注一　村松定孝「泉鏡花解説」(『日本児童文学大系　第四巻　幸田露伴　尾崎紅葉　江見水蔭　泉鏡花集』一九七八年一一月、ほるぷ出版)。

注二　筆者が確認した文献は、注一に挙げた村松定孝の文献と次に挙げた文献である。

村松定孝「鏡花と児童文学」

藤本芳則「泉鏡花「お銀小銀」をめぐって」

滝沢典子「新童謡運動と周辺既成作家(一)——泉鏡花・小川未明・小山内薫・柳沢健——」

注三　木村小舟『改訂増補少年文学史明治篇上巻』。

注四　鏡花作品からの引用は、以降全て『鏡花全集』(岩波書店)に

よる。また、引用する際、旧字は新字に改め、ルビは省略した。

注五　『天鼓』第三号（一九〇五（明治三八）年三月、北上屋書店）掲載。引用は、『鏡花論集成』（一九八三年八月、立風書房）による。

注六　引用は、『日本児童文学大系　第一巻　巌谷小波集』（一九七七年一一月、ほるぷ出版）による。

注七　引用は、脇明子『ファンタジーの秘密』（一九九一年一一月、沖積舎）一六五頁。

注八　鼎浦生は「神秘派と夢幻派と空霊派と（上）」（一九〇六年二月）と題した評論において、〈神秘趣味〉が当時の文学に横溢しているとし、それを〈神秘派〉〈夢幻派〉〈空霊派〉の三種に分類している。鏡花は夏目漱石とともに〈夢幻派〉に分類されており、この〈夢幻派〉の特質は「世の所謂ローマンテックの語最も適当に之が答解たらん、空想を重んじ、情意を重んじ、超現実的の観想自ら読者の感興を駆りて、夢幻の場に翔らしめつゝも、深く人生の真実に触るゝ所ありて、何とはなしに沈痛の消息を伝ふる所」にあるとしている。さらに、鏡花の特徴として「人物の性格が常に超凡俗的なる、また天然と人物との配合連絡が常に超自然的なる、更にまた一篇の落想即ち著者の人生観が、常に超現実的なる」と、「海異記」を引き合いに論じている。

参考文献

『鏡花全集』全二十八巻・別巻一冊、岩波書店

木村小舟『明治少年文学史第一巻』一九九五年二月、大空社

木村小舟『明治少年文学史第三巻』一九九五年二月、大空社

泉鏡花『海戦の余波』（『名著復刻　日本児童文学館　第二集』）一九七八年一〇月、ほるぷ出版

『鏡花論集成』一九八三年八月、立風書房

檜山幸夫『日清戦争――秘蔵写真が明かす真実』一九九七年八月、講談社

脇明子『ファンタジーの秘密』一九九一年一一月、沖積舎

脇明子『増補　幻想の論理』一九九二年一一月、沖積舎

笠原伸夫『泉鏡花――美とエロスの構造』一九七六年五月、至文堂

小林忠雄『色彩のフォークロア』一九九三年七月、雄山閣出版

村松定孝編「泉鏡花年譜」・村松定孝「泉鏡花解説」（『日本児童文学大系　第四巻　幸田露伴　尾崎紅葉　江見水蔭　泉鏡花集』一九七八年一一月、ほるぷ出版）

村松定孝「泉鏡花」（『日本児童文学大事典　第一巻』一九九三年一〇月、大日本図書）

三田英彬「泉鏡花」（『日本近代文学大事典』一九七七年一一月、講談社）

村松定孝「鏡花と児童文学」（村松定孝『泉鏡花研究』一九九二年一

○月、日本図書センター）
藤本芳則「泉鏡花「お銀小銀」をめぐって」（『児童文学研究』第一五号、一九八四年一〇月、日本児童文学学会）
滝沢典子「新童謡運動と周辺既成作家（一）――泉鏡花・小川未明・小山内薫・柳沢健――」（『学苑』第四九三号、一九八一年一月、昭和女子大学近代文化研究所）
鼎浦生「神秘派と夢幻派と空霊派と（上）」（『帝国文学』第十二巻第二号、一九〇六年二月、帝国文学会、大日本図書）
田中励儀「夏目漱石と泉鏡花」（玉井敬之編『漱石から漱石へ』二〇〇〇年五月、翰林書房）

※この論考は、修士論文の一部を加筆・修正したものである。